

自分らしく生きる

北陸学園北陸中学校 一年 安達 結哉

「誰もが自分らしく生きる社会を作りたい。」これは、僕の祖母がよく言っていた言葉だ。祖母は、障がい者支援のNPOの団体を作った。それは、「障がいを持った方が自分らしく生きてほしいと思ったから。」だと聞いた。祖母は六年前に亡くなり、その後も母やスタッフの方々が、その意志を継いでいる。

僕は、よく母の職場に行くことがあった。障がい者支援だが、カフェ、パン工場、事務所、おしゃれなお店など、作業所のような場所ではない。そこで、たくさんの障がいを持った方々が働いている。身体が不自由な方、言葉を話せない方、人と上手にコミュニケーションが取れない方、ずっと引きこもりだった方、様々な方がいる。だけど、みんな生き生きと働いている。

昔、それを母に聞いたことがある。すると、「あの方は人とコミュニケーションが取れないけど、すごく丁寧に作業が出来たり、正確に計量が出来るから、パン工房で働いてるんだよ。」と教えてくれた。カフェで働いている方は、見ただけでは障がいがあるとは思えないくらい普通に働いている。ある方はものすごい記憶力で、僕のことによく覚えていてくれて、会うたびに話かけ

てくれる。「学校はどうだった?」「この前より大きくなったね。」と、いつも笑顔で話かけてくれる。そのように人それぞれ出来ること、出来ないことがある、それを活かせるように職場を考えて、その人がその人らしく働けるように、働く場所を配置しているそうだ。

障がいがあってもなくても、同じように仕事を提供し、その人が楽しく生きがいを持って働ける職場。それぞれの得意なことが活かせる仕事、不得意なことは他の方や、スタッフの方がカバーする。だから、母の職場は、とても明るく、笑顔がたくさんの職場だ。僕は、そんな職場は素敵だと思う。

母の携帯はよく鳴る。それは、障がい者の方からの相談や、話を聞いてほしいといった電話だ。母は、毎回親身になって話を聞き、最後にはいつも笑顔になっている。時には一緒に泣いたり、真剣に悩んだりもしている。大変な仕事だと思うが、母はいつも楽しそうに仕事をしている。母は「障がいを持っての方の支援をしてるなんて思っていない。お母さんも、みんなに助けってもらって、元気をもらってるんだよ。」と言っている。そのように思っているからこそ、障がいのある方から頼りにされるんだらうなど思う。 「やってあげている。」 「仕事だから。」なんて思っていない、そんな母を僕は尊敬している。

僕が小学校の時にも、障がいを持った友人がいた。字が書けな

かったり、読めなかつたけど、いつも明るくてニコニコしている。同じクラスになることが多く、接することが多かった。出来ないことがあると、必ず誰かが助けに行く……。そんなクラスが好きだった。僕が話しかけに行くと冗談を言ったり、笑わせてくれたりして、いつも笑顔がいっぱいだった。落ち込んでいると、彼は僕を励ましてくれ、心配し「どうしたの？」と声をかけてくれた。変な顔をしたり、ふざけて笑わせてくれた。とつても優しく、明るい人気者だった。障がいがある、ない、なんて関係ない。彼の周りには、いつも友達がたくさんだった。僕は人見知りをするので、誰にでも明るく、優しく出来る彼はすごいな！と、いつも思っていた。

「自分らしく生きる」とは、とても難しいことだ。今の僕には、まだそれがどのようなことかは分からない。大人になったら分かるかも分からない。でも、母の職場のように自分の得意なことを活かし、そして不得意なことがあれば誰かが一緒にカバー出来る社会が、人が、もつともつと増えたら素敵なことだと思う。障がいがある、ないではなく、みんなが同じように生き生きと生きていけるようになれば素敵だと思う。僕にも、不得意なことはたくさんある。出来ないこともたくさんある。だけど、もし誰かが困っていることがあるならば、すぐに手を差し伸べられる人でありたい。すごく小さなことしか出来ないけど、僕が出来ることがあれ

ばやりたいと思う。みんな一人ひとり違う人間だ。みんな得意なこと、不得意なこととも違う。だからこそ、誰もが「自分らしく」あるために、たくさんの人が誰かのことを思って、行動出来るような世界になったらいいなと思う。

僕には夢がある。それは「困ってる人を助けたい」という理由からだ。祖母や母のように、誰かの助けになれるような大人になりたい。「おばあちゃん！見ていてね。僕も、おばあちゃんのように誰にでも優しい、誰かのために何か出来るような大人になるから。」

もうすぐ祖母の命日だ。僕の声が届きますように。